

Eureka VI

六年制通信 No. 10 平成30年6月23日(土)号

学校で何を学ぶか

「教育」という言葉はすでに『孟子』にあるらしいし、江戸時代にも使われた形跡があるようなのですが、一般に広くいきわたったのは明治になってからでしょうか。西洋文明を早急に取り入れる必要があったからですが、大急ぎで多くの学校が作られました。その頃、英語の **education** に「教育」という語を当てたのでしょうか。これも広く知られていると思いますが、**educate** とは本来「引き出す」という意味です。たまに、これをもって、教育と訳したのは誤りだとする評論家がありますが、私はそうは思いません。「教え育む」という言葉には、自分たちの後に続く世代を大切に思う、慈しむという語感があると思うので、私は好きです。

昔々、学校がなかった頃、教育とはどのように行われていたのでしょうか。あるいは教育という概念すらなかったころ、子供たちは何を学んでいたのでしょうか。親たちは子供をどのように教え育てていたのでしょうか。今でいう家庭教育しかなかった時代には、子は親から稲の植え方、米の炊き方、食べてはいけない草、咬まれてはいけない蛇、布の織り方、鶏のさばき方、そういったことを学んだはずです。生きる力ですよね。今私たちが、学校教育で「生きる力」などと言っている正体のよくわからないものと違って、本当の意味で食べていくために必要なことを親は子に教えたことでしょうか。親子が密接だったんですね。

余談ですが、現代はグローバル教育の時代と言われています。しかしグローバルとは地球のことですよ。もし、地球上のどこへ行っても現地の人とコミュニケーションが取れ、自分の意見が言え、協働して…、そういう人材が求められているのなら、本当にそうなら、君たちは電気のない土地に生きる術を身につけないといけませんよね。水道のない国には行きたくない、そんなことを生徒に言わせてはいけないんですよ、グローバル教育って。ま、私が誤解しているんでしょうけど。呵呵。

さて、学校ができるようになると、そこで子供は読み書き算盤を習うようになりました。現代でも様々な教科が増えただけで、要するにやっていることは変わりませんね。教科を教えることが学校教育の柱である、ということになっています。これもまた、よく評論家などが、学校は勉強だけを教えるのではなく「生きる力」を身につけさせなければいけないと言って批判しています。相変わらず、私はこの「生きる力」が具体的に何を指しているのかよくわからないのですが、我が校の建学の精神にも教育は教科の勉強だけではないことが謳われています。

私たちの建学の精神の中に、「學術の研鑽と共にジェントルマンシップレディシップを醸成陶冶する」とありますが、これがそうですね。君たち、ちゃんと理解できていますか。「陶冶」とは、例によって我が愛する「明解第三版」によれば「陶器や鋳物を作るように、いろいろな試練を経させて役に立つ一人前の人間に育て上げること」です。この「いろいろな試練を経させて」が大切です。人は「いろいろな試練を経させて」初めて一人前になると、そういう意味です。三重中高で学ぶ君たちは、このことをよく理解してほしいと思います。

ただ、学校生活で君たちに学んでほしいこと、知ってほしいことを一つだけ挙げるなら、私は「世の中は自分の思い通りにはならない」ということだと思っています。同世代の生徒に囲まれて、自分より英語のできる人、でも数学はできない人、性格のいい人、掃除をさぼる人、面白いと感じるポイントが全く違う人、実に様々な人がいます。そのことを知るのが学校生活です。もちろん、親以外に身近にいる大人としての先生という存在も、君たちに多くを教えてください。私の中高時代を思い出しても偉そうな先生、誠実な先生、やたら元気な先生、ミスの多い先生、言行不一致の先生、エコヒイキする先生、頼りない先生などなど、いろんな先生がいました。でも、その人たちと生きていかななくてはいけない。自分にとって「やっかいな？」人々と生きていかななくてはならない。そのためにどうすればいいのか。自分が変わらなければいけないのか、相手を自分に合わせようとするのか、それはどうやったらできるのか。140名ほどの同級生の中にも、こんなにも自分と違う人がいる。社会に出ればもっと…。学校生活を通してこのことを知ることが大切だと私は思います。

今週のおすすめ

・呉 智英 『ロゴスの名はロゴス』 (双葉文庫)

呉さんは、歯に衣着せぬ評論で有名な方ですね。はっきりものを言うので、思想的には当然な好き嫌いがあるでしょうが、言葉に対する指摘 (いちやもん?) は面白いと思います。この本は、その類のエッセイです。

皆さん、駅の構内放送で「危険ですから白線までおさがりください」と「危ないですから白線までおさがりください」と、どちらが流れた方が美しい言葉遣いと感じますか。これ、呉さんは前者の方が美しいと言います。「です」の上にくる品詞を考えると、本来「危ない・です」とは言えないから、というのですね。(本書 p.36)

東京都美術館が新しく開館した。村営の山菜レストランを開店した。島で初めての英語教室を開講校した。これらの「開館」「開店」「開講」は現在すべて「オープン」と言い換えられている。何の意味があるのか。(同 p.55)

と、まあ、こういった話が、面白く書かれています。ぜひご一読を。

前回の答え：世の中

今回の出題：(形) 早く目的の所に達したい (ものに接したい) という気持ち一杯で、そこに達するまでの途中にあるすべてのものが煩わしく感じられる様子だ。

BGM は PIA (渡辺真知子) の *オルゴールの恋歌* でした…。